

## 目次

おわりに	162
ひろしまへの旅、そして、ひろしまからの旅へ	154
演じる	119
うたう	83
縫 <sup>ぬ</sup> う	45
描 <sup>えが</sup> く	5

描<sup>え</sup><sub>が</sub>

<



いまのわたしを描いてください。これまでのわたしが、そこにいます。

「ほれ」

うたた寝していた明の横に、ばあちゃんが立っていた。ドアを開けたままのアトリエの奥から、ばあちゃんご愛用のラジオが、「ミサイル攻撃によって、病院が破壊され……」としゃべる声がきこえた。遠い国での戦争。明は、目を覚ます。ばあちゃんは、左手に持ったトマトソースの瓶を揺らし、ふた、開けろ、とその目で言っている。またかよ、自分で閉めたんだろ。それでも明は、瓶を受け取る。ばあちゃんの手から、テレピン油の臭い。リビングのソファは、古くて硬い。明が起き上がると、ソファがきしみ、背骨もきしんだ。

毎年、日当たりの悪い裏の庭に、ばあちゃんがトマトの苗を植える。そうしてその貧弱な実で、トマトソースを、きっちり三瓶作る。明が手にしたのは、去年の夏にできた最後のひと瓶だった。くたびれたラベルに、赤で③と書いてある。「あんなうらなりト

マトで、おいしいソース、できるはずがない」と母さんは、鼻にしわを寄せる。たしかに。それでも、ばあちゃんは、あきもせず、むしり取ったバジルもざくざく切って鍋に投入し、ぐつぐつソースを煮つめる。

「きょうは、ベーコンのトマトソースパスタだからね。ほれ、早くふた開けないと、んにくが焦げる」「自分でできるだろ」「あのね、あんただって、いつかこうなる」

ばあちゃんは、節くれだった指を突き出す。けっ。まるで西洋の魔女、と明は思う。

明の家族は、ばあちゃんと母さん、男は、おれひとり。ちよつとひねっただけなのに、ふたは簡単に開いた。

ばあちゃんは、画家だ。若いころから、あちこちうろろ放浪し、そこで出会った海岸線を描くのが得意。明に言わせると、「ていうか、そればっか」。境界も見えない海の広がり、びゅーびゅー吹きつける風でねじ曲げられた、得体の知れない海岸の植物が、必ず描いてある。黄ばんだモノトーンの絵。アトリエのなかで、かさかさの植物が増殖し、折り重なって、枯れ草の匂いを振りまく。もちろん、それは気のせいだけだ。